

「暫定基準が設定された動物用医薬品及び飼料添加物に係る食品健康影響評価の考え方について」（令和2年5月18日動物用医薬品専門調査会及び令和2年6月15日肥料・飼料等専門調査会決定）に基づく評価において、3（3）①に該当すると評価された成分のMOEの事例

	名称	評価年月日	使用目的	POD		推定摂取量 (幼小児) (mg/kg bw/d)	MOE
				根拠試験	NOAEL (mg/kg bw/d)		
1	サルファ剤 *3	2024.4.24	動薬（一部飼添） （合成抗菌剤）	ラット 2 年間慢性毒性 (スルファジミジン)	2.2	0.0017 *2	1,300 *4
2	グリカルピラミド	2022.3.16	動薬（内部寄生虫 駆除剤）	ラット 26 週間慢性毒性	2	0.00091 *1	2,200
3	ピリメタミン	2022.9.21	動薬（合成抗菌 剤、内部寄生虫駆 除剤）	ラット発生毒性	0.5	0.00015 *1	3,300
4	ヒドロコルチゾン	2023.7.12	動薬（ステロイド 系消炎剤）	ラット 7 日間亜急性 毒性	1 (LOAEL)	0.00016 *2	6,000
5	マホプラジン	2022.9.21	動薬（鎮静剤）	ラット 3 週間及び 13 週間亜急性毒性	1.3	0.000062 *1	21,000
6	イソシンコメロン 酸二プロピル	2022.9.21	動薬（殺虫剤）	イヌ 1 年間慢性毒性	8.1	0.00037 *1	22,000
7	オルメトプリム	2022.12.8	動薬（合成抗菌 剤、抗原虫剤）	ラット 30 日間亜急性 毒性	12.5	0.00032 *1	39,000
8	ジクロキサシリン	2022.7.20	動薬（抗生物質）	ラット 6 か月間慢性 毒性	25	0.00046 *2	54,000
9	チオプロニン	2022.5.26	動薬（肝臓疾患用 剤）	マウス及びラット発 生毒性	80	0.00046 *1	170,000
10	ジブチルサクシ	2024.10.24	動薬（昆虫嫌忌	ウサギ発生毒性	300	0.00013 *1	240,000

	ネート		剤)				
11	クロキサシリン	2022.2.24	動薬 (抗生物質)	ラット 6 か月間慢性毒性	500	0.0021 *1	240,000
12	ジアベリジン	2022.4.13	動薬 (合成抗菌剤)	ラット 90 日間亜急性毒性	21	0.000046 *1	460,000
13	エンラマイシン	2022.5.26	飼添 (抗生物質)	ラット 6 か月間慢性毒性	50	0.000090 *1	560,000
14	セフロキシム	2022.11.10	動薬 (抗生物質)	ラット生殖毒性	250	0.00041 *1	610,000
15	エトパベート	2023.7.3	動薬・飼添 (合成抗菌剤)	ラット 105 週間慢性毒性	500	0.000052 *1 (国民平均)	9,600,000
16	オルトジクロロベンゼン	2022.2.24	動薬 (消毒剤)	ラット 28 日間亜急性毒性	20	0.000000073*1 (国民平均)	270,000,000

注：資料の不足を考慮しても POD と現行のリスク管理を基にした推定摂取量には十分な余裕があると判断された。また、抗菌性物質については、微生物学的影響を考慮しても、現行のリスク管理の範囲で使用される限りにおいて、食品健康影響は無視できる程度と考えられた。

\*1：TMDI (Theoretical Maximum Daily Intake：理論最大一日摂取量) による。

\*2：EDI (Estimated Daily Intake：推定一日摂取量) による。

\*3：スルファクロロピリダジン、スルファジアジン、スルファジメトキシシ、スルファジミジン、スルファドキシシ、スルファメトキサゾール、スルファモイルダプソン、スルファモノメトキシシ、スルファキノキサリン及びスルフィソゾール

\*4：以下を考慮した上で、十分な余裕があると判断された。

「POD の根拠である甲状腺濾胞上皮細胞過形成は、甲状腺ホルモン合成阻害による血中甲状腺ホルモン濃度低下がネガティブフィードバックにより下垂体からの甲状腺刺激ホルモン分泌をもたらし、甲状腺濾胞上皮細胞でのホルモン合成が持続的かつ過剰に刺激されたことによるものである。ヒトでは血中に甲状腺ホルモン濃度の低下に対して緩衝作用をもつチロキシン結合タンパク質が存在するが、げっ歯類では当該タンパク質は存在しないことが知られており、ヒトではげっ歯類と比べて、甲状腺ホルモン合成阻害による影響は小さいと考えられる。」